



SINCE 1911



はばた 翔け未来へ 松城健児



新潟県立村松高等学校

創立 110 周年



記念誌

高等学校編

激動の中高時代

昭25 高2回卒 大橋 秀雄

高校の第2回卒業生です。戦後5年目の昭和25年に、新制に変わったばかりの村松高等学校を卒業しました。中学3年、高校3年と2つの学校で多感な少年時代を過ごすのが普通ですが、戦中戦後の混乱の中で私が辿った道筋をご紹介して、若い後輩たちに、こんな時代もあったとお伝えしたいと思つて筆を執りました。

私の父は旧十全村新屋の出身で、十全小学校、長岡中学を終えたあと陸軍士官学校に進んで軍人の道を歩きました。戦時中は関東軍参謀として満州、中国、蒙古に駐在し、母と4人の子供は東京で、時折戻る父を待ちながら暮らしました。敗戦の前年昭和19年に、私は旧制の都立第四中学校（現戸山

高校）に入学しましたが、入学直後に父が北京で戦病死しました。享年49、没後陸軍中将に昇進しました。父母の期待を担つて、私も父の後を継いでお国のために尽くそうと思ひました。

海軍将校になるには、中学4年を終えてから江田島の海軍兵学校に進むことはよく知られていました。陸軍では、陸軍士官学校に入る前に、陸軍幼年学校という初期教育を担う学校があり、中学1年または2年を終えて入ってくる生徒を、全寮制で3年間みっちり鍛えました。幼年学校、士官学校、陸軍大学校と進むことが陸軍のエンジニアコースとされてきました。軍国主義華やかなりし当時ですから、入学は難関でした。私は運良

く合格して、敗戦の年の4月1日、八王子にあった東京陸軍幼年学校に入学しました。たった1年で中退した四中は、3月10日の東京大空襲で跡形もなく焼け落ちました。余談になりますが、四中と戸山高校の同窓会、城北会、の名簿の中に、私は昭和25年卒として載っています。1年在学でも、上級の学校に進むために退学したのもとして同窓に加えてもらっています。

幼年学校入学と同時に沖縄戦が始まり、東京は半ば焦土と化し、戦況はますます逼迫してきました。でも入学した生徒たちは、護国のために身を捧げようと意気盛んでした。起居を共にする仲間たちと、午前中は語学などの授業、午後は体育や演習などに励みました。段々と本土決戦も近づき、そのときは生徒たちも戦力の一翼を担う状況となってきました。7月の下旬、親許に戻り別れを告げてこいといわれ、3日の休暇が与えられました。

母はそのとき、新屋にある父の生家に姉2人と弟を連れて疎開していました。私を幼年学校に送り出したあと、空襲が激しい東京から離れようと疎開を決意しました。父の父母と弟一家が住む農家に同居させてもらいました。上越線や蒲原鉄道を乗り継いで辿りついた新屋の家で、一家再会を果たしました。別れの前に「一番食べたいものを作ってあげる」と母はいいました。私は「コロツケ」と答えました。脂っこいコロツケを食べ過ぎたせいか、もともと胃腸が弱かった私は激しい下痢に襲われ立てなくなっていました。母は学校に電報を打って休暇延長を頼んでくれました。

明日戻ろうと思つた8月1日の夜10時過ぎから、南西の空が赤く染まり始めました。新屋から40キロほど離れた長岡が空襲を受け、市が丸ごと焼き尽くされる焔とわかりました。あとになって知ったことですが、2時間ほど遅れて八王子も空襲を受け、1600トン

の焼夷弾で全市が灰燼に帰しました。幼年学校にも3万発の焼夷弾

はもちろん即廃校ですが、混乱することは何もありませんでした。

の擲手に家を買って引っ越してくれました。しかし、すぐさま町を

さい」私は迷わず高校生になることを選びました。高校生になつても、先生、校舎、仲間の顔ぶれは全く変わりません。変わったのは校名だけでした。

が降り注ぎ、直撃や火災で職員生徒10人が犠牲になりました。私は

「これから親元に帰り、文化国家建設に努力せよ」の訓示をもらつて、10日ほどのうちにすべての生徒が学校を離れました。私も背囊

を失つてまた新屋に舞い戻る羽目となりました。父の退職金としてもらった国債は戦後のインフレで紙切れに、軍人恩給は停止、おまけに大火で丸焼けと、母は経済的に一番苦しいときでした。上の

姉は嫁いで東京に去つたので、次の姉が美容師の免許をとり、上町にあつた渡辺牛乳店の1階を借りてお店を始めました。私が中学4年の頃から姉が一家の支え手になりました。お店の横の間で一家が暮らし、通学が楽になつてバスを楽し始めたのもこの頃から

母に伴われて焼け跡の学校に戻り、「急性腸炎のため3日遅れて

を背負つた敗残兵姿で満員の上越線にぶら下がり、母のもとに帰りました。

姉は嫁いで東京に去つたので、次の姉が美容師の免許をとり、上町にあつた渡辺牛乳店の1階を借りてお店を始めました。私が中学4年の頃から姉が一家の支え手になりました。お店の横の間で一家が暮らし、通学が楽になつてバスを楽し始めたのもこの頃から

後になつて知りましたが、実はもう1つ道がありました。それは、旧制高校に進む道です。旧制高校は、本来中学を5年で卒業して入学しますが、4年生にも受験資格があり、合格すれば1年飛び級で進学できたのです。いわゆる4修と呼ばれる秀才たちで、後で東大に入ってみると、1年先輩に私と同年の人が何人かいました。

で野営のような暮らしを始めました仲間と合流しました。今でもコロッケを食べるたびに、もしあの

私は、農家を継ぐと思つたのでしよう。このときは、母も必死に反対して村松中学に入れるよう説得したようです。9月の新学期に合わせて、私は村松中学2年2組に編入が許され、通学が始まりました。晴れの日も、雨の日も、いや吹雪の日も、毎日片道1里の道のりを歩き続けるうちに私は変わってきました。胃弱に苦しんだ

私は、先に述べたような家庭の経済事情から、高卒後は働いて家計を助けて欲しいと母にいわれるものと思つていました。高3が始まる前、母がこう言ってくれました。「貴方も知つているような事情だから、貴方が大学に進むのを助けてあげることではできません。でも、自分の力でやるなら、やりなさい」この一言が、私が母からもらった人生最大の贈り物だと

ときコロッケといわなかったら、私も犠牲者に加わっていたかもし

学校をどうするかという話になつたとき、祖父は加茂農林を強く薦めました。長男の長男である

私は、先に述べたような家庭の経済事情から、高卒後は働いて家計を助けて欲しいと母にいわれるものと思つていました。高3が始まる前、母がこう言ってくれました。「貴方も知つているような事情だから、貴方が大学に進むのを助けてあげることではできません。でも、自分の力でやるなら、やりなさい」この一言が、私が母から

もらった人生最大の贈り物だと

れないと、不思議な運命を感じます。

やがて8月15日がやってきました。その日の正午に玉音放送があるというので、炎天下の焼け跡に

整列してその時を待ちました。雑音が多くて聴き取れないところが多かつたのですが、戦争が終わつたことだけははっきり分かりました。心が空白になる一瞬でした。

若者を預かっていた校長や生徒監たちは、敗戦受諾を予め知つて

た仲間と合流しました。今でもコロッケを食べるたびに、もしあの

私は、農家を継ぐと思つたのでしよう。このときは、母も必死に反対して村松中学に入れるよう説得したようです。9月の新学期に合わせて、私は村松中学2年2組に編入が許され、通学が始まりました。晴れの日も、雨の日も、いや吹雪の日も、毎日片道1里の道のりを歩き続けるうちに私は変わってきました。胃弱に苦しんだ

私は、先に述べたような家庭の経済事情から、高卒後は働いて家計を助けて欲しいと母にいわれるものと思つていました。高3が始まる前、母がこう言ってくれました。「貴方も知つているような事情だから、貴方が大学に進むのを助けてあげることではできません。でも、自分の力でやるなら、やりなさい」この一言が、私が母から

もらった人生最大の贈り物だと

整列してその時を待ちました。雑音が多くて聴き取れないところが多かつたのですが、戦争が終わつたことだけははっきり分かりました。心が空白になる一瞬でした。

若者を預かっていた校長や生徒監たちは、敗戦受諾を予め知つて

私は、先に述べたような家庭の経済事情から、高卒後は働いて家計を助けて欲しいと母にいわれるものと思つていました。高3が始まる前、母がこう言ってくれました。「貴方も知つているような事情だから、貴方が大学に進むのを助けてあげることではできません。でも、自分の力でやるなら、やりなさい」この一言が、私が母から

もらった人生最大の贈り物だと

た。その日の正午に玉音放送があるというので、炎天下の焼け跡に

整列してその時を待ちました。雑音が多くて聴き取れないところが多かつたのですが、戦争が終わつたことだけははっきり分かりました。心が空白になる一瞬でした。

若者を預かっていた校長や生徒監たちは、敗戦受諾を予め知つて

私は、先に述べたような家庭の経済事情から、高卒後は働いて家計を助けて欲しいと母にいわれるものと思つていました。高3が始まる前、母がこう言ってくれました。「貴方も知つているような事情だから、貴方が大学に進むのを助けてあげることではできません。でも、自分の力でやるなら、やりなさい」この一言が、私が母から

整列してその時を待ちました。雑音が多くて聴き取れないところが多かつたのですが、戦争が終わつたことだけははっきり分かりました。心が空白になる一瞬でした。

若者を預かっていた校長や生徒監たちは、敗戦受諾を予め知つて

私は、先に述べたような家庭の経済事情から、高卒後は働いて家計を助けて欲しいと母にいわれるものと思つていました。高3が始まる前、母がこう言ってくれました。「貴方も知つているような事情だから、貴方が大学に進むのを助けてあげることではできません。でも、自分の力でやるなら、やりなさい」この一言が、私が母から

もらった人生最大の贈り物だと

た。その日の正午に玉音放送があるというので、炎天下の焼け跡に

整列してその時を待ちました。雑音が多くて聴き取れないところが多かつたのですが、戦争が終わつたことだけははっきり分かりました。心が空白になる一瞬でした。

若者を預かっていた校長や生徒監たちは、敗戦受諾を予め知つて

私は、先に述べたような家庭の経済事情から、高卒後は働いて家計を助けて欲しいと母にいわれるものと思つていました。高3が始まる前、母がこう言ってくれました。「貴方も知つているような事情だから、貴方が大学に進むのを助けてあげることではできません。でも、自分の力でやるなら、やりなさい」この一言が、私が母から

た。その日の正午に玉音放送があるというので、炎天下の焼け跡に

整列してその時を待ちました。雑音が多くて聴き取れないところが多かつたのですが、戦争が終わつたことだけははっきり分かりました。心が空白になる一瞬でした。

若者を預かっていた校長や生徒監たちは、敗戦受諾を予め知つて

私は、先に述べたような家庭の経済事情から、高卒後は働いて家計を助けて欲しいと母にいわれるものと思つていました。高3が始まる前、母がこう言ってくれました。「貴方も知つているような事情だから、貴方が大学に進むのを助けてあげることではできません。でも、自分の力でやるなら、やりなさい」この一言が、私が母から

た。その日の正午に玉音放送があるというので、炎天下の焼け跡に

整列してその時を待ちました。雑音が多くて聴き取れないところが多かつたのですが、戦争が終わつたことだけははっきり分かりました。心が空白になる一瞬でした。

若者を預かっていた校長や生徒監たちは、敗戦受諾を予め知つて

私は、先に述べたような家庭の経済事情から、高卒後は働いて家計を助けて欲しいと母にいわれるものと思つていました。高3が始まる前、母がこう言ってくれました。「貴方も知つているような事情だから、貴方が大学に進むのを助けてあげることではできません。でも、自分の力でやるなら、やりなさい」この一言が、私が母から

思っています。

担任の川井先生は新潟大学はどうかと薦めてくださいましたが、私は東京に出ようと思っていました。結婚した上の姉の家に居候すれば、奨学金とアルバイトでやってゆけそうだと思います。国立以外は最初から問題外、もともと数学や理科が楽な理系だったので、東大か東工大かと迷いましたが、叔父の「東大の方が潰しが効く」の一言で、第一希望を東大に決めました。高校の先生は、みな中学の先生だったので、大学受験指導の経験はありません。塾や予備校などありませんし、あつても行けなかつたでしょう。友達から借りた受験誌「蛍雪時代」を読んで過去問を調べ、何を勉強しなければならぬか考えました。数学と物理は特に勉強しなくてもいい、英語や歴史は丸暗記、国語は半ば諦める。自分なりに作戦を立て、自分で実行するしかありませんでした。

当時大学に進むには、進学適性

検査という知能検査を受けることが必須でした。受けたのはそれだけで、模擬試験を受けて力試しをする機会もありませんでした。上京して一発勝負で入試に臨みました。終わったあと、出来た問題と出来なかつた問題がはつきり分かりました。東大の受験問題は奇をてらわず、基本を理解していれば素直に解ける問題が多かつたようです。学校で教えてもらう基本をしっかりと理解していたことが、詰め込みの暗記作戦以上に効果があつたと思えました。結果は嬉しい合格でした。

昭和25年3月3日、卒業式の日がやってきました。剣持常昌校長から頂いた卒業証書の番号は95号、同窓生に自慢できるのは、二桁のこの番号だけになってしまいました。校長先生を中心に全員鈴なりになつて撮つた写真が残っています。その顔にはみな見覚えがあります。進学するもの、就職するもの、故郷を離れるもの、地元に残るもの、それぞれの運命を背

負つてばらばらに散っていきました。それから70年、半数の友はずでに亡く、残つたものの半数も自力で外出することができない状況になりました。時は休みなく流れていきます。

私の中高6年間は、戦争に翻弄されて、かなりの紆余曲折がありました。戦後はみな貧乏で、ぼろぼろの服など当たり前でした。通学に履く朴歯の足駄に指の窪みはつきり残り、鼻緒はすぐ切れるので太い銅線を使いました。バレーボールでコートを這いずり回つたこと、裏山のスキー場でジャンプをさせられ腰を抜かしたこと、すべてが遠い青春の思い出です。私が卒寿を迎えても、背筋がすつととしている、すたすたと歩くといわれるのは、村松時代の貴重な贈り物だと思っています。白山の稜線が臉に浮かびます。そこは青春の源流です。感謝と懐かしさを込めて振り返る激動の時代の舞台です。

最後に若い後輩たちへのメッ

セージ。同じ人が二人とないよ

うに、同じ人生も二つとありません。みなそれぞれの環境に応じて生きてゆかねばなりません。苦しい場面、悲しい場面、きつと様々な困難に遭遇するでしょう。私の経験では、悲観よりは楽観、消極よりは積極、他人をなじるよりは自らの至らなさを自覚する、そうゆう主体的で前向きな姿勢が、きつといい結果を生むでしょう。貴方は世界でたった一人の貴重な存在です。胸を張って生きてください。